

愛知スキー協通信

No.270

発行：新日本スポーツ連盟 愛知スキー協会

2017年 8月 1日

〒460-0011 名古屋市中区大須 1-23-13 TEL052-201-4801 (Fax 共)

e-mail: aichiskikyokai@yahoo.co.jp (月1回発行)



<http://aichiskykyou.yukigesho.com/>

編集クラブ：シクラメン&サザンクロス

愛知スキー協会 第46回定期総会を終えて

文責 理事長 寺田 康男

分散会での発言内容の一部(まとめ)

「楽しみ方は、スラローム、山、ボード、ショートポール、スキー教室等、普通では無い魅力は色々ある」

「それらを妨げるキーワードが車、金、体力、の無くなったり、少なくなったり、はじめから無かったりすることです」

「いまの若い人と高齢化と共にこれから更に増えるし深刻化もする」

「でも、反対にそれらの克服がチャンスになる」

「ある人と一緒に行けば、一緒に楽しめ安くいける」

「同年代だけじゃない人との繋がり goodness を最近感じる」

「道具を始めての時はただで借りられる」

「安く、安全に、皆で自然に学べる」

「山荘や4WDのワゴン車を持っている人はけっこう居る」

「東海ブロックスキー協の拠点スキー場は、野麦峠のファミリーゲレンデのペアリフトの下が当面は良いと思う」

「クラブを作って、旗を作って、その下に集まるのが良いと思う」

「若い人の定着には男女の出会いが絶対条件」

「山スキークラブは他に無いのだから絶対的な強みだ」

「現場で声を掛ける楽しさをもっと実感してほしい」

「スキーの上達を求めない人も多くいることに気づいてほしい」

「あと5年なら残れる自信があるが、その先は検討がつかない」

・・・以上とても良い方向の話し合いができました。ただし、一行でまとめて、発言出来るようにみんなが慣れれば、もっと多くの人数で(総会が)議論が出来るようになると思います。



寺田会長議案の提案



分散会討議グループ1

今年やっというろんなことが繋がり始めました。

・一人一人が自分で考えて議案方針が出来たから、総会の目的あり方についての文章は理事会で

確認できたので、議案資料から外しました。

・今期のテーマスローガンを一つに決められていないが、分散会テーマは二つに絞り方向性がより明確化してきた。

・9年前から方針の方向性は変わっていない。分散会で導きだしたい意図も変わっていない。改めて見直して私たちの狙いはぶれていないと実感できました。

以下の文章はアンダーラインの引いてない部分は、38期から41期方針案の文章そのままです。
アンダーラインの部分はその方針を基に実践から導いて現在も引き継いでいる教訓です。



スキー協が繋がり、拡がり続けてほしいのです。スキー協の発展の歴史の中で、数多くの教室の成功とそれに伴って発展した指導法と組織の発展拡大の経験の原点に、学びなおしをしようではありませんか。「へた（初心者でも、不器用な人でも）でも教えあう」は、これからのスキー協の発展にも繋がる基本理念の一つだと思えます。

・ 教程書の滑りが出来るか出来ないかに焦点が当たりがちで出来ないのはどうしてなのか、これが出来なくて本当にこの先にどういう問題点が残るのか、出来ない人が出来るように何故なったのか、の経験の紹介と分析が足りないのでは無いだろうかと焦点を当てたのが、東海ブロック技術委員会での雪上の実践討論です。その結果出来たのが技術レポートの一つが「子どもと滑る」です。

ここ5年目指してきたスキー協の新しい道の一つの方向性が専門性の追求です。そして、スキー協らしさの追求です。

・ 9年+5年=14年も同じことを問題視して続けてきました。今も重要視して引き継いでいるのはその先に成果が実る可能性があることを皆が実感しているからです。

スキー協らしさの追求で、たどり着いたスキー協がどんな集団なのかの、一つの終着点が、「スキー協は、教えることが好きな人達だ」といえると思います。今残っていて、中心になって頑張っている人の行動の共通点の思い浮かべてください。とっても良いサンプルが目の前にあることに気づいて下さい。

・ 教程書の技術を理解できて仲間を糧に上手くなった人「教え合うが」習慣になっている人です。理解できなく、その機会の無い人は去っていった。

上達の変化を感じられる特徴を持ったスポーツであることを思い出してください。

・ 特に初心者 出来ないことが確実に出来るようになるのが実感できるのだから今こそ初心者・高齢者にスポットを当てるのがチャンス

組織人数の減少する中でクラブ活動の変化傾向の一つとして教室嫌いが増えていることは、感じつつも見過ごしてきました。好きな人もいれば、嫌いな人もいるのだと勝手に思い込んでいました。でも、自分自身がよい方向へ変化することは、嫌いなはずがありません。一方的な押し付けだけでは上手くなりません、自分で感じて、自分のものにして、人に伝えてこそ上手くなります。そうして育った人は何人も存在しています。その面白さを実感した人が、今もスキー協の中心に居ます。

・本人自身が意外と理解できない 他人からの視線で自分自身を見られたときに上手くなっている自分にやっと気がつく。

・本人の自分で感じた運動感覚と他人から観た運動の状態に違いがあるのがスキー技術の魅力。上達と共にその違いが段々少なくなってくる。

・それが教室なのに教室は圧迫感や、不自由感があり寄りつかない。自分自身は、そうであっても子どもや孫や連れてきたパートナーがなびけばチャンスはあります。

・そして教えられるのは嫌いでもアドバイスをするのは好きだったりします。その反対も然りです。

・子どもを含めて、若い人、スキー協の後継者にそれが出来ていなかった。

・上手くならなくても、スキーをしているだけで満足できる人。年に何度も行けなくても満足出来る人の現場での要求は何でしょうか？そこに食い込めていないからスキー協にいる人の裾野が広がり切れていないのです。

・それは、それに費やす時間と労力と熱意の維持力が少ないからです。一人で持てないものは、皆で共有すれば良いのであって、その解消の一つの光が拠点スキー場を持つことです。その中で実践をかさねられれば新しい何かが見えてくるように思いました。



・上手くならなくても、スキーをしているだけで満足できる人。年に何度も行けなくても満足出来る人の現場での要求は何でしょうか？そこに食い込めていないからスキー協にいる人の裾野が広がり切れていないのです。

・それは、それに費やす時間と労力と熱意の維持力が少ないからです。一人で持てないものは、皆で共有すれば良いのであって、その解消の一つの光が拠点スキー場を持つことです。その中で実践をかさねられれば新しい何かが見えてくるように思いました。

・「中途半端に上手い人ほど覚えた技術は排他的に

隠そうとする」。

・「出来る人は出来ない人の悩みと気持ちと出来るようになった経過が理解できない」ことが案外多い。

・でもそれは、「はき出す場所や機会が無いだけ」なのかもしれない。

・拠点スキー場があって、拠点スキーバーンがあって、初心者から上級者までが同じバーンで違う練習が出来ればみんなで教え合うことが出来る。

・当面の拠点練習方法が野麦峠のファミリーゲレンデのリフト下のメッシュポール練習です。そこにはクラブの旗があって加入を促すリーフレットがあれば技術論と組織論と運動論が繋がります。

多くの会員が長く生きてきた結果、少なからず、老いと病気や怪我と闘いながらも自分にあったスキーを探しながら、スキーを続けてきた経験と、そこで、得た克服法があるはずで。

スキー協発展の歴史の中で、数多くの教室とそれに伴って発展した指導法と組織・クラブの発展拡大の経験がありました。その原点に学びなおしをしようではありませんか。教え合う場に、「誘いあう」は、これからのスキー協の発展にも繋がる基本理念の一つだと思います。

・「新人が新人を連れてくる」は、忘れてはいけない教訓です。

・結婚や子育てでスキーが制限されることはあっても、「同じ境遇の仲間で作れば新しい仲間の輪が広がりました」。

・「身体的な特徴も個性の一つです」それは、専門性の追求でもあります。

・スキーシーズンで無いリスクはその分、頭でじっくり考えをまとめられるチャンスです。

その「チャンスを皆で共有しましょう」。

八幡平スキー（2017.5.4～6、ぶなの木スキークラブ）報告

ぶなの木スキークラブでは5月連休のスキー行事として、八幡平スキーと薬師岳の山スキーが並行して取り組まれた。ここでは、八幡平の方を報告する。東北の八幡平の山スキーは道路の雪がとり除かれていて観光地となっている。宿泊は後生掛温泉という半分ほど湯治客専用の棟を併設している旅館に泊まった。連休の間旅館入り口の道路沿いに車がいっぱい駐車していた。この旅館がある秋田県北部までの交通は車を使用して13時間位を運転手交代で移動したが、3パーティがそれぞれの目的があって移動し、鹿野市の後生掛温泉に集結した。1日目は蒸けの湯温泉の駐車場に車を一台デポして八幡平頂上近くの駐車場に車で移動、ここで岩手スキー協の須藤さんたち4人と合流する。須藤さんたちとの再会は2012年の3月頃に東北スキー協との交流と言って八幡平に来て以来5年ぶりのことかと思う、私のことを覚えていた方が見えたのにはびっくり、支援されているような気がした。あの時は天候が悪くて展望がなくどこをどう滑ったのかさっぱり記憶がない。山小屋の中で石油ストーブが用意されていてみんなで休憩し食事を取ったという記憶があるのみである。駐車場でシールを付けて源太森まで登り、そこから黒谷地湿原まで滑る。夏道を登り返す。源太森近くで岩手スキー協の人たちと別れ、われわれは八幡平頂上（1613m）へ向かう。湖沼の上と思われる緩やかな斜面をいき急斜が少しあって頂上に着く。



源太森頂上

高度差の少ない広い雪の平原でガスに巻かれたら迷ってリングワンデリングになると思いつつ、好天の景色の展望を楽しみ、地図と比較し、悪天では困難な現在地確定をしたりした。次に藤助森に向かう。ここでシールをはずし車をデポした蒸けの湯温泉近くの駐車場まで2～3キロを滑る。頂上Pの車を回収し宿に帰る。2日目は岩手スキー協のガイドで畚岳（もっこだけ）に登る。頂上近くは急斜面である。車を置いた藤七温泉まで滑り降りる。雪質の変化があり、面白い斜面であった。次に頂上駐車場の下の斜面を滑り、藤七温泉まで滑る。頂上Pまで戻り、岩手スキー協の人たちにお礼を言って別れた。シールを付けて藤助森へ向かう。昨日と同様、藤助森から蒸けの湯温泉近くの駐車場まで滑る。3日目は雨で道の駅の花輪ばやしの屋台や史跡尾去沢鉦山を見学、きりたんぼを食べて、病気がんが治るといふ玉川温泉の岩盤浴を見に行った。4日目はそれぞれが帰る。有意義な連休でした。（大森和彦、2017.7.26）



畚岳



畚岳頂上